

特集 敗血症

～残された課題～

「日本版敗血症診療ガイドライン」や「Surviving Sepsis Campaign Guidelines」によって敗血症のエビデンスが整理され、標準的な敗血症診療が整いつつあります。その一方で、これらの診療ガイドラインが取り上げていない、あるいは取り上げるのが困難な疑問もいまだ多く存在しており、敗血症に関する今後の検討課題となっています。

2018年に、Surviving Sepsis Campaignの関係者が集まって敗血症診療における課題を整理した論文“Surviving Sepsis Campaign: Research priorities for sepsis and septic shock”が発表されました（Crit Care Med 46: 1334-1356, 2018）。

このなかでは、敗血症に関する“research priorities”として、

- ①感染症の診断と治療
- ②輸液と循環作動薬
- ③補助療法
- ④スコアリング
- ⑤診療体制と疫学
- ⑥POST-ICU

という6つの臨床的課題と、

- ⑦基礎医学

があげられています。

これらをふまえて本誌『救急医学』では、2020年最初の特集として「敗血症 ～残された課題～」を企画いたしました。特集の冒頭では前述したSurviving Sepsis Campaignの論文において上記“research priorities”が示された背景などを簡潔にまとめ、続く各論では上記論文で示された項目をもとに、「敗血症診療における残された課題」の実診療をふまえた解説と、日本におけるこれから進むべき方向性について検討していただきました。「残された課題」には、欧米と共通の課題・疑問がある一方で、日本独自のものも存在します。

本特集により、敗血症診療の「現在の課題」と「その解決に向けた方向性」を読者の皆さまと共有し、敗血症診療のさらなる発展につながる新たな一歩になればと思っております。

『救急医学』編集委員会

企画担当：名古屋市立大学大学院医学研究科先進急性期医療学 松嶋 麻子